

ワイルドと日本

井村君江
（明星大学教授）

「オスカー・ワイルドと日本」という今回のシンポジウムの主題は、比較文学研究で扱う場合、いくつかの領域にわたる可能性が考えられる。（1）ワイルドの（作品、人物、芸術観）が日本に及ぼした影響。（2）日本に於けるワイルドの受容史、日本の作家、学者たちの中のワイルド。（3）ワイルドの中の日本（ジャポニズム）、ワイルドが日本をどう見ていたか——いわば影響研究と源泉の研究で、（間接的であるがワイルド自身のフランス文学からの影響関係も無視できない）主として一作家の外国に於ける波動史である。ワイルドの場合、文学作品でも批評、演劇、童話があり、それらの翻訳があり、さらに舞台上演、美術、音楽と迎えられるので、じつに広範に亘るものとなる。しかし今回扱った範囲は（1）と（2）であった。

記録を見ると、いまから十五年前の昭和五十四年、私は既にワイルド協会で「日本に於けるオスカー・ワイルド」の表題のもとに講演をしている。本協会の初代顧問であり、いまやワイルド受容史の研究対象でもある本間久雄先生のご講演と一緒にあった。その時はすでに発表済みであったが、1891年に増田藤之助が新聞に掲載した『社会主義下の人間の魂』の翻訳と1904年の森鷗外の『サロメ』紹介から始め、明治、大正、昭和の各時代に於ける主な作家を中心に、受容の特色を辿った話であった。それらの時代のワイルドの評価は、一口に言って本国でのヴィクトリア朝モラルの網目で変形された上に、さらに日本風になったもので、この見方にはホルブルック・ジャクソンの世紀末観よりも、マックス・ノルダウの病理学的な分析による退廃論の影響の方が強い。そのため日本の文壇でのワイルドには、長いことデカダンの徒、ディレッタント、耽美主義者、悪魔主義者、同性愛者、自己中心主義者としてのレッテルが貼られ、作品の正当な評価を述べるものよりも、特異な作家としての興味本位の記事が雑誌には多く見られ、これは長く続いた。いわば「歪んだワイルド観」である。

ワイルドは安政7年に生まれ、明治33年に世を去るわけであるが、日本の人々に「優れた詩人」として紹介されるのは、死後5年たった明治38年、イギリスより戻った平田禿木が、『獄中記』を、薄幸な一詩人の日記とみて、「一代の嬌児、一朝獄に下りて、悲運に泣く」として話した『明星』主催の講演と、『二六新聞』に連載した記事からと言えよう。

「人生を芸術化した作家」として紹介するのは本間久雄で、明治42年頃から『早稲田文学』を中心に、のちに『英国唯美主義の研究』（昭和9年）にまとめられるワイルド論を、頻繁に掲載する。唯美主義者とみて、その実人生のダンディズムから表現の警句、逆説、機知に至る表現の特色まで論じたのは大塚保治で、これは「ワイルドの生涯、人格、作品論」として大正4年から6年にかけて行った東大美学の講座である。今みても優れた正当な研究であるが、大学の教授たちのこうしたアカデミックな説は、文壇や一般の人達にはなかなか届かない。人々のあいだに広まるのは舞台からであり、特に大正の日本では『サロメ』のワイルド」として人々の間に知られていくのである。

しかし大正2年から始まる舞台上演史と受容の在り方を迎えてみると、本国に比べてやはり「歪んだサロメ」である。第一に脚本『サロメ』の翻訳は、明治40年の森鷗外が初めであるが、これはヘドウィヒ・ラッハマンのドイツ語訳からであり、翌年の村上静人訳もドイツのレクラム叢書のキーフエル訳を底本にしているというように、日本に入った最初の『サロメ』はドイツ経由なのである。原文はフランス語なので、アルフレッド・ダグラス訳とロバート・ロス訳に違いがあるように、ドイツ語からの日本語訳には、原本からのニュアンスの違いが見られる。更に松井須磨子の舞台監督は島村抱月であったにせよ、イタリア人ローシーが振り付けをやり、しかし解釈の違いから抱月とも衝突するというように、ワイルドからは遠いサロメの世界なのである。第二の歪みは、サロメの壁画がある教会など存在しない日本では、サロメが『聖書』に登場する宗教上の人物とは知らず、ただの恋する女であり、それが男の首を切って口づけすれば、まさにグロテスクな行為であり、ヴェールの踊りもエロティックそのものでしかない。浅草ピンク座のストリップ、奇術応用サロメ劇から、更に芸者のお座敷踊りサロメ・ダンスへと、次第に下降していったのも当然かもしれない。

日本でのワイルド受容の歪みをみていくと、土壌としての日本それ自体の特色が見えてくるのであるが、サロメにかぎらずワイルドにたいする一般の正当な解釈は、昭和に入ってからと言えようが、日本ではまだ興味本意の歪んだ眼鏡で見られるような面がある。しかしワイルドの作品から影響を受け、自分の作品を書いた芥川龍之介や谷崎潤一郎、佐藤春夫、日夏耿之介から三島由紀夫などの作家のワイルド理解は、研究者のそれとは違い、自らの資質に合わせた直感的なもの個性的なものである。各作家の特質をみきわめ、ワイルドとの接点を作品のなかに見出さねばならない。各作家の作品と『獄中記』『サロメ』『ドリオン・グレイ』を見ていっただけでも、日本の耽美主義作家の系列の特色がみえてくる。ワイルドは日本現代作家たちの作品ばかりでなく芸術観にも、おおきな影響を及ぼしていることが分るのである。